

# News Letter

特集 2～7頁

## 「生き物と共生する地域づくり」をめざして

寄稿 「信濃川 その下流域では」 (財)新潟県環境衛生研究所・大谷道生氏

寄稿 「一之江境川親水公園物語」(財)江戸川区環境促進事業団・鈴木弘行氏

...他

**寄**

生バチは他の昆虫に卵を産み付け、幼虫がそれを食べて育ちます。ハチ目の大多数は、このような寄生バチであるヒメバチやコバチで構成されています。しかも、寄主あたりの寄生バチの種数を考慮すると、寄生バチはそれ以外の昆虫の全種数と同じ程度存在するだろうという研究者もいます。このように寄生バチは大所帯ですが、そのほとんどは陸上昆虫を寄主としており、水生昆虫に寄生するものはごく少数です。その中でトビケラの蛹に寄生するミズバチ類はいわば変わり者といえます。

ミズバチ類はヒメバチ科に含まれており、2属13種が東アジアに集中して分布しています。日本にはニン



ミズバチに寄生されたニンギョウトビケラの筒巢(上)。  
前方から伸びているのはミズバチのマユの一部(下)。

## 潜水蜂

ギョウトビケラ *Goera japonica* に寄生するミズバチ *Agriotypus gracilis* とアツバエグリトビケラ数種 *Neophylax* spp. に寄生するミヤマミズバチ *A. silvestris* の2種が生息しています。中国の論文ではミズバチを「潜水蜂」と書いていますが、文字通り、このハチは寄主のトビケラの蛹を求めて水に潜っていきます。トビケラの幼虫は蛹になる時に溪流中の石の表面に自分の筒巢をくっつけます。そして、ミズバチの雌成虫はトビケラの蛹を探すために石づたいに歩いて水中に入ります。歩くだけで決して泳ぎません。「泳がない」と言うよりはむしろ「泳げない」と言った方が正解です。水中で歩いてい



ミズバチの雌成虫。体長約7mm。

る途中で何らかの拍子に石から離れてしまうと、もがきながら水面まで浮き上がってしまいます。カナヅチながらも水中に入っていきこの連中はええ根性してます。ただし、雄成虫は水中に入ることはありません。水辺で雌と交尾するぐらいです。某検察函説には水中での活動時間は10～15分となっていますが、実際観察していると30分以上はざらで、3時間を超えることもありました。潜っている時には、体が気泡で包まれています。こんなわずかな空気でも活動に十分な酸素を供給できるでしょう。

ミズバチは稀な昆虫ではありません。しかし、大阪府内ではミズバチの生息地のうち、2つの川にダムが建設されようとしています。このような目立たない昆虫は、人知れず生息地が失われているのかもしれない。

(大阪支社自然環境調査室・青柳)

# 特集

## 「生き物と共生する地域づくり」をめざして

「生き物と共生する地域づくり」をめざし、各地で様々な試みがなされている。その方法、視点、関わる立場等は多様であり、混沌とした状況が生まれているようにも感じられる。

ここでは、社外のお2人方の寄稿も交え、4つの視点から「生き物と共生する地域づくり」に関わっている人たちの声、現場での試行錯誤等についてを紹介する。

視点1 大河川における多自然型工法

視点2 都市域におけるピオトープの整備と課題

視点3 生き物と共生する地域づくりのコツ

視点4 ハートウェアの時代

## 寄稿

日本有数の大河川 **多自然型工法** 現場からの報告

### 信濃川

その下流域では...

財団法人 新潟県環境衛生研究所 環境管理課・大谷道生

#### 水生生物の生息環境としての信濃川

河川を生活空間とする生物は、その生活ステージによって多様な空間が必要となります。瀬や淵、抽水植物帯や水辺に張り出した木の根などはその代表例です。このような要素が多くある河川ほど、水生生物の生息環境として優れているといえます。

新潟平野を流下する日本有数の大河

川である「信濃川」の下流域は護岸が進み、河岸が切り立った崖のようになっている流れが増えています。また、農業用水確保のため、かんがい期には流れが堰き止められ、非かんがい期には堰を開放することから、かんがい期と非かんがい期の水位に大きな差が生じ、水際の環境が安定せず、水生生物の生息環境としては劣悪な流れが随所で見られてきました。

#### 現行対策と今後の方向性

水生生物の生息環境を多様化するために、信濃川下流域では一部の地域で粗朶沈床や礫による多自然型工法が施行されています。しかし、人為的な流量管理によって水位が変動し、これらの施行区域が水面よりも上に出たり、泥が溜まって間隙がふさがると、必ずしも適正に機能していない状況が見



水路のような信濃川下流部  
広い範囲で護岸が進み、護岸の  
無い場所でも水深が2 m程度まで  
落ち込んでいる。

#### 多自然型工法（ワンドの形成）

捨て石により河岸になだらかな  
傾斜をつけ、人工的なワンドを創  
出している。また、水中には粗朶  
沈床が施工されている。



受けられます。当所が実施した施工区  
間の調査においても、豊かな河川環境  
の指標となる水生生物の出現種数、個  
体数共にわずかなものであり、未だ生  
物の生息空間として良好な状況にない  
ことが窺えます。これは、現行の多自  
然型工法の多くは河川の上流～中流ま  
でを対象としたものが主体であり、水  
路のような形状を示す大河川の下流域  
には適していないためと考えられます。

このような信濃川下流域ですが、河  
口に近い新潟市街や黒埼町では一部に  
広い抽水植物帯が発達し、多くの水生  
生物が生息しています。しかし、ここ  
で新たな問題が起きようとしていま

す。この付近は親水公園になってお  
り、多くの人々が訪れるにもかかわらず、抽水植物帯が河川の主流からそれ  
た淵にあることからゴミや排水由来の  
泡などが溜まり、訪れた人々に不快感  
を与えています。また、上流から流さ  
れてきた土砂が堆積し、その上に抽水  
植物体形成されていることから、他  
の地域に比べ、止水域の泥の中に生息  
する水生昆虫が多くみられます。特  
に、人の生活に不快なユスリカなどが  
大量発生して周辺の住宅や病院の中  
にまで入り込み、住民や入院患者から苦  
情が出はじめています。

以前から、住宅に隣接した

小さな地域での多自然型工法の実施に  
あたっては、地域住民の理解が不可欠  
であるといわれてきました。今後は、  
信濃川のような大河川に対する多自然  
型工法の施工にあたって、それによ  
る生態系の変化を予測するとともに地  
域住民の意見を取り入れることが重要  
であり、行政サイド独自の企画や施工  
ではなく、住民参加型の施工、管理が  
必要になってきています。当所として  
も各地の施工例を見据えた広い視野を  
持ちながらも地域に根ざした調査・施  
工の協力をしたいと考えております。

#### 財団法人

### 新潟県環境衛生研究所

#### < 業務内容 >

- ・環境アセスメント及び環境調査
- ・水質、底質、生物等の分析試験及び実験
- ・数値解析業務
- ・環境改善に係わるコンサルティング業務
- ・環境教育活動

URL <http://www2.next.ne.jp/kanken>

E-mail [kanken@seagreen.ocn.ne.jp](mailto:kanken@seagreen.ocn.ne.jp)

## 寄稿

都市につくられた自然 **ビオトープ** 現場からの報告

# 一之江境川親水公園物語

いちのえさかいがわ  
しんすいこうえん  
ものがたり

(財)江戸川区環境促進事業団 施設課・鈴木弘行

### はじめに

『生き物と共生する地域づくり』をめざして、各地でさまざまな緑空間が創造されています。江戸川区に平成8年4月に全線オープンした一之江境川親水公園も、ビオトープと位置づけられる空間として整備されましたが、その管理運営には疑問点や問題点も多く、試行錯誤の毎日です。そんな、行政担当者の日々の思いを報告させていただきます。

## ～時代のニーズと行政の思惑～

### 「野の川」の再生

江戸川区は全国に先駆けて、1973年に古川親水公園を誕生させました。その後、この親水公園事業は全国に広まり、親水公園はすっかり市民権を得たと言えます。

1982年に区内2番目の親水公園・小松川境川親水公園が古川親水公園の経験を生かし造成されると、ますます親水公園先進都市・江戸川区の名が全国に広まり、日本のみならず諸外国からの視察団もあるほどです。しかし、江戸川区がそうしてしまったせいか、親水公園というと「緑に囲まれた流れるプール」の感があります。

実際、古川も小松川境川もその水質管理はプール並みで、安全で快適な空間として根強い人気があります。しかしながら、「魚は居ないの?」「ザリガニは?」との意見も一部に聞かれ、行政側としても生物

(魚類)の生息空間としての可能性も、かなり前から探っていました。水のシーズン以外は水路に入る利用者はほとんど無くなるので、塩素による消毒をする必要も無くなります。そこでオフシーズンにコイや金魚を実験的に放流したりもしましたが、この段階ではビオトープと言うより「池の鯉」の域を出ていなかったといえます。

そんな中、区間最後の親水公園・一之江境川の計画が始まりました。一之江境川は区の中心部を流れる全長3.2kmの川で、計画にあたっては、建設協議会が設置され住民の意見も取り入れながらの出発です。もともと前述のように生物の生息の可能性を探っており、時代も身近に自然を呼び戻す事の必要性が叫ばれ始めていたので、「自然」を全面に出した親水公園の整備とすることとなりました。

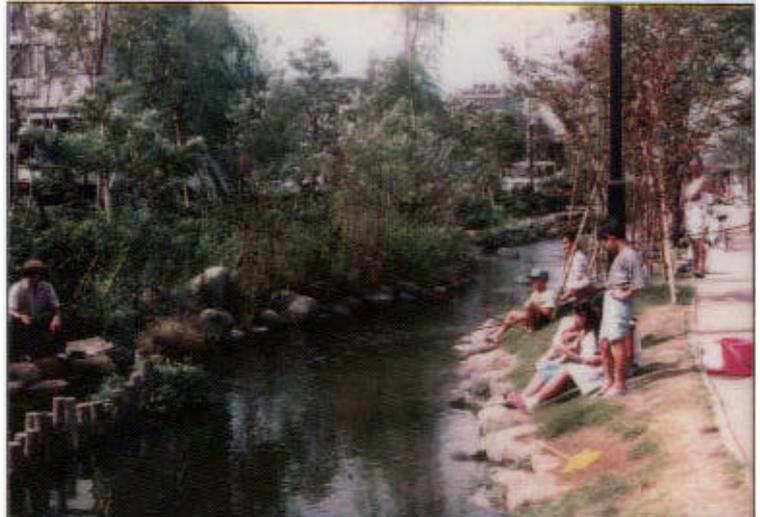
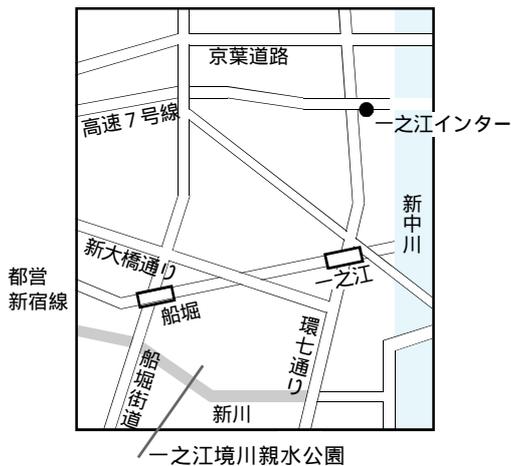
この親水公園のテーマが「野の川の再生」でした。

### 「野の川」のイメージとギャップ

さて、「野の川の再生」をコンセプトに一之江境川の建設が始まりました。生物の生息を意識した環境造りが随所になされ、平成7年4月一部オープンの運びとなりました。一之江境川は新中川より取水し、浄化せずにそのまま原水を流しています。よって、魚をはじめ多くの水生生物は原水と一緒に流入してくる・・・筈です。しかし、どんな生物が、どの程度流入し、この川で生息するのか、何の保証もないし推測する術もなかったのです。

行政が「魚が生息する親水公園」を造成し住民に提供するのは、オープン時に川面に魚影が無くては様にならないのです。安易ですが、「親水公園の造成」+「魚の放流」=「魚が生息する親水公園」の計算式に基づいて水生生物が放流されま

## 【一之江境川親水公園】



一之江境川親水公園

した。コイ・フナ・メダカ・タイリクバラタナゴ・アメリカザリガニ等々です。担当者レベルでは「野の川」にはザリガニやメダカ、ドジョウ等の小魚が生息すれば十分で、子供たちがザリガニ釣りや魚捕りを楽しむ風景がよく似合う川でありたいと強く感じていましたが、小魚やザリガニでは川面に魚影が見えません。色物（錦鯉・金魚）こそ放流しませんでした。比較的大型のコイ・フナを多く放流したのは住民に魚の存在をアピールするためという行政の思惑も絡みました。しかし、これが「野の川」からは少し違った方向へと進んでしまう事となりました。

それは放流したコイ・フナが釣りに

最適の型だったのです。オープン後、目立ったのは「ザリガニ釣りの子供達」ではなく「コイ・フナ釣りのおじさん達」だったのです。「野の川」が一転「釣り堀」と化してしまったのです。勿論、おじさん達の釣りがいけないというわけではありませんが、やはり「野の川」のイメージからは大きなギャップを感じたのは、私だけではなかったはずす。

### 魚の大量死がきっかけに！

そんな中、一つの事件が起きました。オープンから半年程が過ぎた晩秋の頃でした、一之江境川で魚が大

量に死んでしまったのです。原因は水質にあることは明らかでした。一之江境川の取水口は東京湾からも近く潮の干満の影響を受け、特に冬季を中心に塩分濃度が上がります。最大では2%にもなるのです。急激な塩分濃度の上昇が、淡水魚を中心の放流魚達には耐えられなかったとの疑いが最も高かったのです。また、青潮の流入による酸欠の可能性も考えられました。

どちらにしても、この事件を期に安易に魚を放流できないとの認識ができあがりました。おかげで、一之江境川の生物調査に少ないながら予算も付き、ビオトープとしての本格的な運営が全線オープンした平成8年度より始まることになりました。

#### 江戸川区環境促進事業団

昭和55年4月に発足。

事業概要：区内の各親水公園、総合レクリエーション公園、行船公園、ポニーランド、水上バス等の施設整備・管理運営。

〒132 東京都江戸川区中央1-4-1 (江戸川区役所内)

TEL:03-3652-1151 FAX:03-3652-1550

現在、様々な場所でビオトープ、多自然型河川整備、エコロードといった生き物と共生する場づくりが行われている。生き物にやさしい技術といった言葉も多く聞かれる。ブームと言っても過言でない。しかし、本気で生き物の立場を考えている事例はとても少ないような気がする。つまり、見かけは何となく自然風であるが、具体的にどんな生き物のことを考えて設計したのか不明確であったり、そこには本来いない生物を目標にしたり持ち込んだり、その地域の生き物の現在の暮らしをあまり考えていなかったり、育成、管理に失敗してしまったりといった具合で「住民不在の政策」が多いのである。

では、なにがいけないのか、なにがそうさせているのであろうか。こ

れらの事業に関わっている多くの人々が、「よくわからない」、「生き物についてはシロートだから」と言う。しかし、私は、専門的知識が無いからうまくいかないのではなく、計画する人たちの「自然観」に問題があるような気がしてならないのである。自然を公園のオブジェと同じようにとらえている節がある。あそこの市でホテルの流れを作ったからうちにもほしい。こんな発想ではうまくいくわけがないと思う。

生き物についてはシロートだからといって、自分もヒトという生き物であることを忘れてはならない。つまり、「コツ」は、人間に対して政策を行う時と同じように考えればよいということだ。福祉を行うときには地域の人々の暮らしや意見を調べたり聞いたりして、どんな施設やどんな

サービスが必要か考える。生き物と共生する地域づくりも全く同じなのだ。地域の生き物たちが今どんな暮らしをしているのか、なにを望んでいるのかを良く調べる。今や昔、その地域で生き物たちが多く暮らしているすぐれた自然＝森や川、池や原っぱと言った空間がどんな構造をし、どんな生き物が暮らし、どこに分布しているのか。そして、現在、彼らの暮らしがどうなっているのかを調べる。そして、その優れた自然をモデルとして、現在の住民（生き物）に必要と考えられる施設やサービスを提供する。それが、ビオトープであったり、多自然型河川整備であったり、汚水を減らしたり、保全エリアを作ったりとかいう具体的な政策になる。生き物は公園のオブジェではなく、言葉を持たない住民なのだ。そして必要なことは彼らの暮らし、経済を考えた福祉政策なのだ。もちろん、彼らの家や食料を奪い、生活の場を汚しているのは人間なのだから。

(取締役副社長・逸見一郎)

## 生き物と共生する地域づくりのコツ

今更ながらの

「自然が先生!!」「自然に学べ!!」

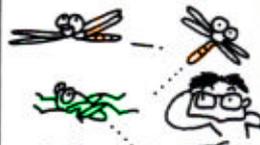


その1.

目標の設定に注意

「ある生きもの」を目標にする場合

ひと昔前にそこにいた身近でアイドル的な生きものを設定するのが「グー」。



トンボやバッタなんか良い目標でありましょう...



おい! あま、オレも誰だと思、こんの? タガメだよ、タガメ、お、こんの?

『タガメ』を復元しようなどという高望みは都市圏ではちょっと非現実的な目標になってしまう。

その地域の自然に合った目標も設定しよう



また「ある環境」を復元するという目標の場合は「ひと昔前の風景」も目標とするのがよいでしょう。



その2. ビオトープネットワークに注目!



近くに田んぼがあればカエルやトンボが復活しやすいと鬼われ...



現場

こんなかんじで環境ネットワークのあるなしで、期待できる内容(生きもの)も変わってくる。



その3. 環境の小構造を検討!

生きものにはそれぞれの生態に応じた小構造が必要だ。



ですから簡単に環境の復元なんて、木植えしやあすい済むよ。というわけにはいかなひのさ。

もとあったすぐれた自然をもっと育てたいをモデルとした小構造も復元することが必要だ(モザイク)



その4. 育成工事が大事!



Start 今後、その作られた環境が、いかに変化していくか、正確に知り得るのは、神様しかいません。



ですから、復元状況のモニタリング、生物育成の管理、時には改修をする必要があるのです。



以上、ビオトープ計画のポイントを整理しました。

とここで...



稀少種物の保全デス。

稀少種 その地域の稀少種を未来に残す重要な意味がある。



小川で遊んだことなど...



そういう「体験する風景」も次世代へ残しておくことがビオトープの意味なのだと思います。

では具合いびビオトープについて御いん居が説明します、と...



おあとがよろしいようで...



ゲ... 容もねる... ゲ... ゲ...



おしまい

「生き物と共生する地域づくり」は市民の力が大きな原動力になる。そして市民には、人間と他の生き物のコミュニケーションをとる役割を果たすインタープリターが必要である。我々はこのような人のことをハ・トウェアーと呼びたい。

## ハートウェアーの時代

### 心を持った人の時代

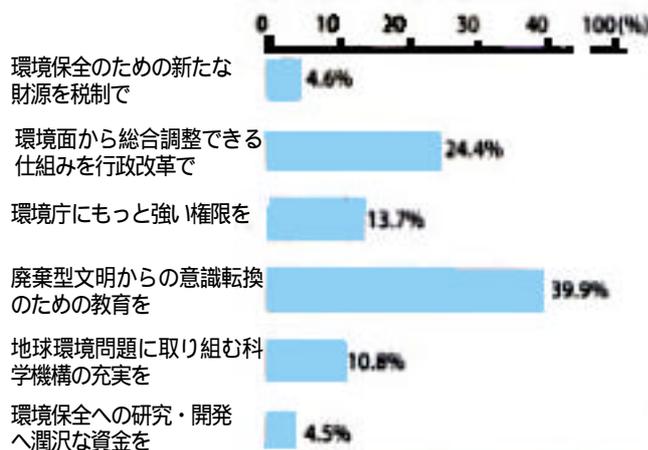
1997年の10大ニュースに間違えなく取り上げられるのが、神戸の児童殺人事件であろう。

事件の後、報道各紙にあるキーワードが登場した。それは『心の時代』『心の教育』といったものだ。中身はというと、余りにもごもつとも、あまりにも当たり前の意見である。裏返してみると、現代は、この当たり前の『心』を持った時代ではなく、『心』の通う教育もなされていないなかったということになるのだろうか…。

現在、大量生産、大量消費に支えられた『初めに物有りき』といったこれまでの価値観とは異なる方向性が必要であると言われている。事実、今年の春から夏にかけて行われた東京新聞の読者アンケートの結果<sup>1</sup>を見ると、日本の今後の環境行政には何が必要かという質問に対し、「廃棄型文明からの意識転換のための教育を」という回答が約4割を占めトップであった。どうやら、人々はここに新しい方向性を求めているようだ。我々は、神戸の事件以前から、『心の時代』『心の教育』を渴望していたのだろう。

5年ほど前、私は当社の会社案内の冒頭に、「心を持った人の時代」というコメントを書かせてもらった。その主旨を簡単に述べると、「社会事象が複雑化する現在、この判断に当たって、もうマニュアルによる機械的対応には限界がある。これからは心を持った一人一人の人間が、自らの判断で対応することが求められる時代が来る」といったものである。このような方向性は、再現性の低い自然という事象を相手にしてきた当社においての、極めて必然的な帰結といえる。

### 日本の今後の環境行政には何が必要ですか



1

東京新聞 1997年8月18日

「地球温暖化・環境問題アンケート」集計結果より

2

「建設技術者のための環境教育プログラム策定」(清水建設株式会社)の成果の一部は、97年9月に開催された、第52回土木学会において発表されました。また、来春は環境教育学会をはじめ、関連学会に発表を予定しております。



「建設技術者のための環境教育プログラム策定」(清水建設株式会社) 野外プログラム実施風景

### ハートウェアとは...

近年盛んに環境教育、体験学習といった言葉を耳にする。当社においても、「建設技術者のための環境教育プログラム策定」<sup>2</sup>(清水建設株式会社)、「野外体験学習施設を中核に据えた、地域おこしプログラムの策定」(高知県、某自治体)、国営みちのく杜の湖畔公園の利用プログラム作成<sup>3</sup>(財団法人 公園緑地管理財団)、その他各種講座、イベントなどへの人材の派遣、プログラムの提供など、これらに関する業務が次第に増え始めた。

私は、このような場における環境教育をよく寄席に例える。寄席には、話をする場所、つまり寄席その

ものが必要であり、古典であれ、新作であれ、そこで演じられるネタが必要である。そしてどんなにすぐれたネタがあろうとも、それをうまくはなす噺家がいなければならない。素人が話したところで、さほどおもしろいものではないのだ。ここで言う場所としての寄席は、環境教育に対応させるとビジターセンターであったり、博物館であったりするのだが、よく考えると、そのような場所でも、環境教育のプログラムは展開されている。例えば学校であり、公園であり、野山の一角であり...。ネタさえあれば、つまりプロ

グラムさえあればどこでも実施可能だ。しかし、この場合も、寄席同様にうまい噺家、つまりそのプログラムを運用する指導者が「心を持った人」である必要があるのだ。

我々は、場所としての寄席を通常ハードウェアと呼び、ネタに当たる部分をソフトウェアと呼んでいる。では噺家(=インタープリター)は...?

私達は、これをハートウェアと呼ぶことにしたい。これこそが心を持った人そのものでなければならないのだから。

(代表取締役会長・仁井雄治)

3

国営みちのく杜の湖畔公園の利用プログラムは、2部構成、12の主要プログラムとその他応用プログラムを紹介した。



パークレンジャーチャレンジカード(左)とその手引き(右)



パークレンジャーチャレンジカードより

## むらの自然をいかす



守山弘著

発行 (株)岩波書店

定価 1,400円

**本**書は、現代の農村地域において、かつては普通にみられた生物各種の移動分散能力とともに、二次林、農地、屋敷林、ため池等の環境構成要素の空間的配列とそのメンテナンスの方法・頻度を考察することにより、伝統的な農村の生物多様性をいかにして保全するのかを論じている。

筆者の守山氏は、茨城県南部の国立農業環境研究所内に「ミニ農村」という、小規模な農村環境モデルを造成し、これと周辺の農村地域をセットとしての生物調査を実施しており、本書はその集大成である。

研究の結果の一例を紹介すると、オオイトトンボ、アジアイトトンボ、ショウジョウトンボの3種の移動距離は、前2種が1.2~1.3km、ショウジョウトンボが1.0~1.1kmであるという。しかも、筆者らの研究対象地では、明治時代までは、ほとんどのため池が1km以内の距離に位置し、上記のトンボ類が移動可能だったと論じている。

これが、種の移動分散能力と、伝統的な農村における樹林地、農地、水系の環境構成要素の空間的配列の関係である。では、これらの環境構

成要素のメンテナンスと種の関係については、どうなのか？

「ミニ農村」では、年を変えて一つずつ新しい池を造成しているという。オオイトトンボは、どの池でも造成2年目までは個体数が増加していくが、3年目以降は減少していくという。これは、「オオイトトンボが抽水植物がまばらな水面を好むため、(造成後の時間が経過し)抽水植物が増えるにつれて個体数が減少するのである。」「造成初年度の池は泥上げされ水を張られたばかりの池と同じ状態である。だから年をかえて池をつくっていくことは、年を変えてため池の泥上げを行っているのと同じことになる。」と書かれている。

ビオトープ事業や自然環境復元事

業等の計画策定に際しては、保全・復元目標種が設定されることが多いが、その際、周辺からの種の供給ポテンシャルを評価し、植生管理の方法を考案する段階で、資料不足に悩まされるケースが非常に多い。例えば、トンボ池を創出した場合、どんな種が周辺から飛来してくる可能性があり、かつそれらが定着するためには、どんな植生を有する池が望ましいのか?、といった個々の種の移動と、定着に必要な環境の質に関する情報は十分集積されていない。本書には、トンボ類に限らずこうした情報が数多く紹介されているとともに、情報を得るために必要な調査手法のヒントも示唆されており、まことに有用な一冊であるといえよう。

(本社自然環境調査室・根本淳)

## 著者紹介

守山弘 (もりやまひろし)

1938年神奈川県平塚市生まれ。東北大学大学院理学研究科(化学専攻)卒業。現在、農水省農業環境技術研究所環境管理部資源生態管理科上席研究官。著書に「自然を守るとはどういうことか」(農村漁村文化協会)等がある。

## シリーズ紹介

自然環境とのつきあいかた

- 1 「山とつきあう」岩田修二
- 2 「森とつきあう」渡邊定元
- 3 「川とつきあう」小野有五
- 4 「湿地といきる」樋口広芳  
成未雅恵
- 5 「海岸とつきあう」小池一之
- 7 「まちの自然とつきあう」武内和彦

# 「もっと議論を、もっと協力を」

日本哺乳類学会1997年度大会参加報告 1997年10月9～12日 於 北海道大学

去る10月9～12日、札幌市の北海道大学にて開催された日本哺乳類学会の1997年度大会に出席してきた。

自由集会、一般講演、ポスター発表、シンポジウムとそれぞれの場で熱い議論が交わされた。その中には我々の業務に役立つようなものも多く見られた。

初日の自由集会で村上興正氏（京大）が世話人を務める「哺乳類の環境アセスメントのあり方」という企画が行われた。大型、中型、小型種のそれぞれの研究者から現状と問題点が説明された。その中で我々が調査で用いている河川水辺の国勢調査マニュアルがたたき台とされ、問題点が指摘された。各種共通の問題点として、生息の有無の確認といったレベルの調査しか行われていないことが多く（個体数等生息状況まで詳細にやった調査は少ない）、仮に何かがいたとしても周辺に生息環境が残っていればそれでよい（評価の基準が単純過ぎる）。即ち開発優先型のアセスメントと批判された。小型種の調査はネズミ類のトラップ調査のみでモグラ類、コウモリ類（貴重種多い）は現状の調査では種のリストに入っていない。ネズミ類にしてもワナの設置数や日数も少なく、捕獲されなければ生息していないと判断されていると指摘された。村上氏の言は確かに理想論であるが、行政や事業主が、今後詳細な調査の必要性を感じ、調査のための予算が付くような方向に変わっていくよう研究者からも呼びかけていく必要があるのではないかと感じた。

また今後、今まで以上に我々には調査能力の高さが求められてくると再認識させられた。

2日目の自由集会では昨年結成された「リス・ムササビネットワーク」の第1回集会が行われた。特に印象に残った話題は柳川久氏（帯畜大）による北海道十勝地方におけるエゾリスの交通事故の事例で、行政にアピールを行った結果、リスが道路を横断しなくて済むように木にワイヤーを付け、エコ・ブリッジとしてリスの安全な移動のための施策を行った。哺乳類の移動のための配慮はカルバート等いくつか知っていたが、リスを対象としたものはこれが初めての事例であり、今後の仕事の参考になるのではないかと思った。

また、リス類については分布調査はほとんど行われておらず、どこにどんな種がいるのかわからない。こうした情報をネットワークを活用して集積できないかとの意見が出た。我々のように全国で調査をしていけば、得られたデータで活用できるものも多い。このような貴重なデータをネットワークに提供できるような方向にもっていけないかと考えている。

哺乳類学会では相変わらずシカの発表が多く、大量増加と農林業被害、その防除が議論されていた。しかしどの演者も触れていなかったが、predator（捕食者）の不在という根本的な問題をもっと議論すべきだと感じた。prey animal（被食者）はpredatorの捕食圧があって進化してきた。即ちオオカミの絶滅がシカの増加に大きく関係している。そうした議論が欠けている。

最近学会にも同業者の方が結構出席されるようになり、研究者も環境調査の分野を真剣に考えるようになってきている。こうしたつながりを今後、深めていき、もっと議論し、もっと協力してよりよい仕事ができるよう努力していかなければならないと感じた。

私自身、学会に出席するようになって久しい。参加するだけでも勉強にはなるが、やはり「学会は発表するところ」であると痛切に感じた。同業者で発表される方も多くなっており、調査等で得られた知見を眠らせず、何らかの形で公開することができるよう尽力していきたいと考えている。それが調査に携わる者の使命であり、責任ではないだろうか。

（大阪支社自然環境調査室・井上剛）

日本哺乳類  
学会事務局

〒062 札幌市豊平区羊ヶ丘7

農林水産省森林総合研究所北海道支所鳥獣研究室

事務局長：齋藤隆

TEL 011-851-4131 FAX 011-851-4167

入会は「日本学会事務センター・日本哺乳類学会係」まで

〒113 東京都文京区本駒込5-16-9 TEL 03-5814-5810 FAX 03-5814-5825

弊社のNews Letterをご覧頂きまして誠にありがとうございます。本号で特集した「生き物と共生する地域づくり」は当社の大きな目標です。当社ではそのためのアプローチとして「自然に関する正確な情報」「自然環境の保全・復元のための措置」「関係者への啓蒙・普及及び環境学習」といった3つの方向性で取り組みを行っています。東京本社ではそれぞれの方向性に応じたセクションとして、「自然環境調査室」、「生態技術研究室」、「企画室」があり、大阪支社では部門分けはありませんが、各技術者がそれぞれの得意分野に応じて、また、時には東京本社と連携しながら業務にあたっています。

特に、近年は道路、河川、ダム、住宅など様々な場面で「生き物との共生」が求められていますが、具体的な仕事の中では難しい対応・課題が大変多く、十分な成果をあげるには不断の努力が必要であると感じます。また、環境アセスメント法の制定により当社の中心的業務である動植物調査も、より一層精度の高い成果が求められるようになると思います。このような社会的動向に答えるべく、当社の各技術者が個々の技術レベルの向上を目指して研鑽していくことはもちろんですが、クライアントの皆さん、日頃ご指導いただいている先生方とネットワークしながら、常に総合的なアプローチで業務にあたるよう心がけて行く所存です。今後ともよろしくご指導賜りますよう、御願い申し上げます。

最後に、本号に寄稿していただいた(財)新潟県環境衛生研究所の大谷さん、(財)江戸川区環境促進事業団の鈴木さんに心より感謝申し上げます。小誌News Letterは今まで社員の発表の場、社外に対する情報発信の場になっていましたが、今回社外の方から寄稿していただいたのを期に、今後はネットワーク誌的な紙面作りを目指して編集していきたいと思っております。みなさまのご協力を賜りますよう重ねて御願い申し上げます。

## 大阪支社移転のお知らせ

拝啓 この度、弊社は下記のとおり大阪支社事務所を移転いたすこととなりました。これを機会に社員一同ますます社業に精励努力いたす所存であります。今後ともよろしくご支援、ご指導のほどお願い申し上げます。

敬具

代表取締役社長 高塚 敏  
大阪支社長 浜田 拓

### 移転先

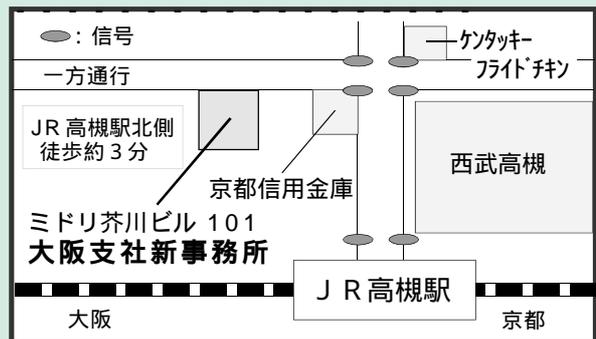
〒569-1123 大阪府高槻市芥川町1-15-18 ミドリ芥川ビル101

TEL 0726-84-3182 (代表) 従来と同じ

FAX 0726-84-3184 従来と同じ

新築ビル入居のため、予定の住所となっております。  
変更があった場合は改めてお知らせいたします。

これまでの住所は平成9年12月までとさせていただきます。  
また、新事務所における業務開始日は、平成10年1月5日の  
予定となっております。



ドングリや蔓を採ってきて、リースや人形を友人宅で創った。温かい部屋で、今採ってきた素材で何かを創るのはとても楽しい。気に入ったのを幾つか飾って帰った。翌朝、友人からの悲鳴にも近い声の電話で起こされた。「小さな白い芋虫が部屋の床中転がっている!!」どうやらドングリ虫が出てきたらしい。正体はゾウムシの仲間の幼虫である。ドングリに卵を産み付け、そこで育ち、土中で蛹になるのだ。さて、今度の休みは連中を雑木林へかえしに行くか。(中村)

以前本誌で紹介した「都市農業公園」に通っていた時は、毎朝6時15分の電車に乗っていたので、今頃の時期がいちばん辛かった。今まで冬至といえは、ユズ湯にカボチャという認識だったが、その日を境に日がのびると思うと待ち遠しい限りであった。冬至という日をからだで感じ、心待ちにできたのは、私にとっては貴重で心豊かな体験であった。(加藤)

【発行】.....株式会社地域環境計画

発行人.....高塚敏

編集.....加藤奈津江・中村兼吉

東京本社

〒154 東京都世田谷区桜新町2-22-3 NDSビル

TEL 03-5450-3700 / FAX 03-5450-3701

営業窓口.....逸見一郎

大阪支社

〒569-11 大阪府高槻市古曽部町1-1-8

TEL 0726-84-3182 / FAX 0726-84-3184

営業窓口.....中山香代子・津田洋子